



ブラジル体験記

兵庫県立播磨農業高等学校 2年 農業経営科 谷本 祥之

私は、ブラジル研修に行くことが決まった頃は楽しみな気持ちが強かったのですが、出発日が近づくにつれて不安な気持ちが強まってきました。日本と全く違う習慣、気候、言語、そしてインターネットでブラジルについて調べてみても治安の悪さを感じる内容が多く見られたからです。しかし、出発の直前に昨年この研修に参加された先輩と話をすることがあり、その話を聞いているうちに不安もようやくなくなっていきました。

11月4日、関西国際空港で行われた出発式では多くの方々に見送られ、私たち13名の研修生はいよいよブラジルへと出発しました。これまで経験したことのない長時間のフライトは想像を超える長さでとても疲れました。しかし、韓国、アメリカと乗り継ぎをする中で「ここは外国だ、目にする人、文字、耳にする言葉、そして空港の臭いが違う」と五感で外国を感じることができました。ブラジルに近づくにつれて、飛行機の窓から見る景色は少しずつ変化していき、山林から平野部、そして赤く色づいたセラードと呼ばれる大地が確認でき、気持ちが高ぶってきました。

サンパウロ空港に到着して、ホテルまでの道のりは専用バスでした。日本とは違い道路がガタガタなものには驚きました。時差ボケと長旅の疲れが重なってブラジルでの初日はとにかく眠く、翌朝までぐっすり眠ることができました。

弓場農場へ行く道中、見えた景色は日本で見る景色とは違い、道路の幅が広くずっと先まで続いていて、とても広大な畑などがあり私は「今、日本にいるのではなくブラジルにいる」と実感し始めました。弓場農場ではご飯を食べる前に角笛を吹き、それを聞いたみんなが集まり食事がはじまります。ここで出された食事は想像以上においしく、特にデザートに食べたマンゴーやバナナは格別でした。農場見学を行い、日本では見たことのない木からなる実があり、「ジャボチカバ」という紫に近い色をしていて、見た感じでは少し食べるのには抵抗がありましたが、食べてみると凄く甘く不思議な食感でした。他にも「蛇実」や「シュシュ」など日本では聞いたことのない野菜や花、果物がたくさんありました。野菜の

収穫をさせていただき、日本ではハサミなどで収穫を行っているのに対して、ブラジルで今回使用した農具は「ファカ」と言うナイフに似ているシンプルな形のもので収穫をしました。

牧場見学では、コブ牛という牛を見に行きました。名前のおり背中の上にコブがある牛でした。牧場はとても広く、ずっと先まで牛がいて、全く畜産のことが分からない私でも「凄い」と感じる事ができました。牛のエサは1日に4回与え、そのエサには、ダイズの搾りかす、ワタの実、オレンジの皮、バカスなどだそうです。

アブカラーナの農業高校では、日本の高校との違いを知るために、お互いの国の高校について意見交換をしました。たくさんの意見交換をした中で、私が印象に残っていることは、アブカラーナの農業高校では1日の授業の回数が日によって大きく違っており、50分の授業が、少ないときは5回、多い日には10回あることです。ティータイムの時間では通訳の人がいない中、ジェスチャーとポルトガル語がわかる本を片手にコミュニケーションをとり、心が通じた時は嬉しくて感動しました。学校の農場見学では、土をよくするために牛の糞を発酵させ、ミミズを育てていました。私たちの高校では行っていないことを学び勉強になりました。育てていた野菜は日本とほとんど同じでした。野菜を育てる際に日本でよく見られる畝は無く、サラサラした赤土でしたがしっかりと野菜が育っていました。ここで頂いたヤシの実味のヨーグルトはとてもおいしく、日本で販売してほしいと思いました。「シャコネーゼ」と言うイモがあり皮に少し切れ目を入れれば後は手で簡単に剥ける面白い作物がありました。

ホームステイでは、ホストファミリーと対面するまでどんな人か分からなく、色々と不安だらけでした。しかし、いざ対面するとみんな笑顔で私たちのことを迎え入れてくれました。ちゃんと言葉も通じ安心しました。ホストファミリーの方々には本当に良くして頂き、色々な場所に連れて行かせてもらい感謝してもしきれないほどお世話になりました。

バイオエタノール工場では、着いた時に耳栓が渡されましたが、耳が痛くなるほどの音と強烈な匂い

が私たちに襲いました。ここのバイオエタノール工場の従業員は2万2千人で28ヘクタールの敷地で作業を行っています。工場の中では300人が働いており、自分たちの作ったエタノールをエネルギーに工場が動いています。凄く大きな工場ですが、パソコンの操作で動いている機械に驚きました。サトウキビを使い砂糖を作り、できあがった3種類の砂糖のうち、品質の悪い砂糖をエタノールにしていました。出来た砂糖は外国に輸出し、エタノールは国内で車などが走るために使用されていました。実際に出来上がったエタノールに触って見ましたが、とても冷たく、すぐに乾きサラサラになり気持ち良かったです。でも、消毒はできないそうです。エタノールを作っている工程を見せていただき、臭いがきつく、目が開けられないところもありましたが、ブラジルの広大な土地だから、こういったことが出来るのだと思いました。

イグアスの滝では、その大きさに圧倒され、自然は凄いと改めて感じました。少し水が茶色く濁っていて流れる水の勢いが強く、大きな音を上げ水同士がぶつかり合い濃い霧ができていました。

私の研修テーマは、「日本とブラジルの野菜作りの違い」でした。このテーマについては数々の農業体験、見学で学ぶことができました。そしてもう1つが「日本とブラジルの文化の違い」です。このテーマに関しては、今思えば、漠然としすぎていて、学ぶことが山ほどあり、この研修の毎日が勉強でした。例えば食です。私が毎日とった食事でも日本では食べたことが無い物が沢山ありました。言葉や生活習慣、日本とは全く違います。しかし、どちらが正しい、間違っている、そんなことは無いと思いました。

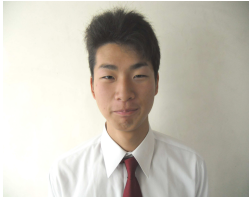
ブラジル研修を終えて、ブラジルでは初めてと驚きの連発で色々な経験ができ、とても充実した日々を過ごしました。あまり実感は無いのですが、少しは何か成長できたとおもえます。このブラジル研修で経験したことを糧に夢に突き進んで行きたいです。ありがとうございました。



ホストファミリーの方と



釣りに連れて行ってもらいました



日本の裏側を見て

兵庫県立播磨農業高等学校 2年 畜産科 古川 衛

サンパウロ到着

約1日半をかけて到着したサンパウロ空港は、私の予想以上に暑かったです。バスターミナルで私たちを待っていたバスは設備良いバスでした。出発直後、ブラジルの道路は路面がとても凸凹で気分がすぐに悪くなってしまいました。ブラジルで初めての昼食を頂いた日本食レストランでは、どこか違う日本食の味で、一人前の量がとても多く日本の3倍くらいありました。兵庫県人会の会長さんが、経営している「明石屋」では、とても美しいモルフォ蝶と花で作った壁かけや鉱石を使ったサンゴ形の置物がとても美しく、ブレスレットやネックレスは、日本とは違い、一つ一つ本物の鉱物や宝石を使っているのに値段があまり高くなく驚きました。見学に行った移民史料館では、移民の時の船の大きな模型や初めて使用されたはがき、土地を開拓していた当時の写真などとても興味深かったです。夜の兵庫県人会のみなさんとの交流会では、移民した時のお話を聞くことができました。

弓場農場

弓場農場では、日系のお年寄りから小学生までの大勢の家族の方が共同生活をされています。

食事は全て自給自足で、野菜や肉はもちろん、パンや豆腐、味噌、漬物もすべて一から作っています。料理も、味噌汁やカレーなどとても美味しく、デザートで食べたマンゴーはとても甘く、こんなに美味しいマンゴーは始めて食べました。

弓場で行った歓迎会、研修生、スタントではみなさんととても喜んでくれました。

実習では、トラクターが引っ張る荷台に乗り農場に行きました。農場ではマンゴー、アスパラガス、ザボン、ブラックベリーなどいろいろな野菜やくだものがありました。中には大根、デコポンなど日本で見られる物もありびっくりしました。

牧場見学では、地平線まで先が見えない農場にゼブー(コブ牛)が約一万頭もいて、生き生きとしていました。ゼブーの移動は馬に乗ったカウボーイと牧羊犬が誘導し、エサは、バカス(サトウキビのかす)とオレンジの皮を細かくしたものなどをトラックで

豪快にあげていました。先まで見えない飼槽に、数えきれないほどのゼブーが並んでエサを食べている光景は圧巻でした。夜、弓場の人が話してくれた話はとても興味深く、「全ては水から始まる」「昔の良さを守り、それでいて新しく良い物を作る」など、良い話をたくさんお聞きすることが出来ました。

アプカラナ農業高校

敷地面積1000ha、1985年創立し農業と環境について2つの学科に分かれています。44名の先生のうち、20人は農業専門の先生です。今年は452人の生徒が入学し、50以上の地域からきているそうです。また寮があり、120名が入寮しています。

ここで私は、プロジェクト発表をしました。発表は日本語で私が少し話した後、ポルトガル語に訳す。この繰り返しでとても時間が掛かりました。しかし、生徒のみんなは良く聞いてくれて、良かったです。そのあとの意見交流会でもいろいろな事が聞けました。ティータイムの時、言葉が通じなくてもコミュニケーションができ感動しました。

翌日は学校の農場見学をしました。生徒が行っているミミズで土をよくする研究を見たり、水耕栽培、乳製品の生産などいろいろな事をしていました。中でも私が一番驚いたことは牛の爪切りです。日本と違って牛をしっかりと縛り、ヤスリなどで爪を削っていたからです。日本では、爪を切る際にはそんなに縛らず、爪もただ切るだけなのにこのように違うのは国が違えばやり方一つ違うのだなと思いました。

ホームステイ

ホームステイ先では、ちゃんと言葉が通じるのか、コミュニケーションがとれるかなど不安がいっぱいでした。しかし、ホストファミリーのみなさんはとてもやさしく、日本語も上手なので本当に安心しました。お父さんの経営しているフットサル場では、陽気な人たちと話し、奥さんにはショッピングモールや市場に連れて行ってもらったり、プレゼントをもらったり、お兄さんや娘さんともいろいろな事を話すことができ本当に楽しかったです。野々瀬さんありがとうございました。

バイオエタノール工場

バイオエタノール工場は私が想像していたものと全然違いました。まず1つ目は、バイオエタノールに使うサトウキビは工場の横で作っていました。28万haのサトウキビ畑があり2万人の人が働いていました。2つ目は、エタノールだけを作っているのではなく、1日あたり砂糖700t、エタノール25万lを生産していることです。その他にも、搾り終わったサトウキビのカスを燃やして工場を動かす電気を作り出し、資源の再利用をしていたりと、とても感心できる所がたくさんありました。

駒込農場

車で見学しても広すぎる駒込さんの農場は、地平線まで続く大豆畑とトウモロコシ畑があります。きちんと手入れが行き届いていてすごいなと思いました。自宅でのティータイムの時出してくれたものも印象深かったです。1つは「トウモロコシアイス」です。思っていたよりもトウモロコシの味が強く、一言で言ってみると「冷えたトウモロコシに砂糖をまぶした感じ」でした。もう1つはブラジルの代表的な食べ物パステルです。パステルは専用の皮に好みの具材を入れて揚げたものでした。駒込さん家のパステルはミンチ状になったお肉とタマネギが入っていてとても美味でした。日本でもこういった物があればいいなと思います。

イグアスの滝

イグアスの滝を実際に見るまでは、滝がカーテンのように流れているだけなのだろうなと思っていました。実際に訪れてみると、そこにはジャングルにただ道が作られただけのような自然があり、緑が生い茂っていました。イグアスの滝に行くまでの道や階段には、大量発生した日本では見られない巨大なミミズがいたり、トカゲがたくさんいました。険しい道のりを歩いていると、まだ滝が見えないのに小雨が降るように水しぶきで服が濡れました。そして、滝を見た時はさすがでどんな言葉でも表現できませんでした。イグアスの滝で一番の見どころの別名「悪魔の喉笛」最大落差80メートル以上の所に設置された展望台では、水しぶきで道が見えません。滝の迫力を肌で体験できました。念のためレインコートを着て展望台に行ったのですがまったく意味がなく。全身にシャワーを浴びているようでした。

次に、川の中州にあるサルマルティン島へ向かう

船着場から、滝つぼに突っ込むボートツアーを体験しました。まずは手始めに小さな滝に突っ込む。小さいと言っても日本では普通に観光名所になりそうなレベルの滝です。その下をくぐったので当然のようになり濡れます。早くも着ていた服がすべてびしょびしょになりました。そして、続けざまにメインの大きな滝へ。今度はさらにすごい。少し近づいただけで目が開けられませんでした。それどころか息をするのも苦しく、頭からはあり得ない位の水が降り注ぎ、足元は揺れるボートの浸水で脛まで水につかりました。「これって、まるで溺れているみたい!？」と思いました。あまりの苦しさに、早く終わって欲しいと思いましたが、帰り道で右から左からとサービスよく2回も滝に突っ込んでくれました。あり得ないほどびしょ濡れになって船着場に上がった時は、おおげさではなく無事に生還できたことにホッしました。

ちなみにメインの滝と言ってもイグアス最大の(悪魔の喉笛)ではありません。そんなとこに突っ込んだらたぶん即死だと思いません。それにしても水の威力、、、。本当に滝の力、水も力は凄まじかった。

研修を終えて

このブラジル研修ではいろいろなブラジルを見ることができました。1つ目は大規模農業です。ブラジルの広大な土地を生かした地平線まで続く畑。1万頭を超える数えきれないほど牛を飼育していたことです。2つ目は日本とは違う農業の考え方です。畑にはたくさん植えて雑草を生えにくくする。畜産では、肉牛を大量に育て、付加価値をつけるのではなく大量に生産し一頭一頭は安いのが数で補っていました。3つ目は、笑顔です。ブラジルの方々はどうな事、どんな時でも明るく陽気で、ホームステイ先のマリंगाの住宅地では、必ず一軒はパーティーをしていました。日本もブラジルの方々のように明るい未来が築けたらいいなと思いました。

最後になりますが、まず藤本団長、赤沼副団長にはご迷惑をかけてしまいましたが、最後まで指導していただきありがとうございます。添乗員のゴリさんにもたくさんご迷惑をかけました。でも、研修の間、たくさんのお話が出来て本当に楽しかったです。ありがとうございます。

そして、このような研修の機会を与えてくださった兵庫県、みどり公社、学校の先生方、両親に感謝したいと思います。本当にありがとうございます。



日本とブラジルの違いを見つけた研修

兵庫県立播磨農業高等学校 1年 畜産科 平川 黎

・はじめに

私がなぜブラジル研修を希望したかという、日本とブラジルの農業規模の違いを自分の目で確かめ『農業』の違いを見つけることと、ブラジルの農業に携わる人々との触れ合いを感じたかったからです。私がこのブラジル研修で強く学んだことは三つあります

・YUBA農場

YUBA農場での農業規模のことです。YUBA農場では、広大な敷地を持っており、日本から移民してきた人たちが原生林だったジャングルを切り開いて作られた農場です。私はそこで初めてブラジルの農場を見ました。

まず、とても広大な農地に感動しました。いったいどれぐらいの人が働いているのだろうかなど素朴な疑問を持ちました。その農場では、移動にトラクターを使っていたり、農場のあたり一面にマンゴーが落ちていたりなど、日本では考えられない風景が広がっていました。あまりに広いため、端から端まで行くのに1時間ほどかかります。作っているものはたくさんあり、フルーツはもちろん、豚・鶏などの家畜もいました。しいたけや花卉、そして一番人間に大切な米や小麦も作っていました。日本では考えられないことがブラジルでは普通なのかなと思いました。残念ながら時間が無かったので農業体験はできませんでしたが、私にとっては見るもの全てが新鮮であり、感動と驚愕ばかりでした。

食事ではカレーや鶏の肉を焼いたもの、そして、とても新鮮な野菜を頂き、それらはYUBA農場で採れたものばかりだったので「自給自足ってとてもすごいんだな」と思いました。日本とブラジルの国土の大きさの違いもさることながら、この広大な農地を開拓した人たちの偉大さを感じることができました。日本とブラジルとの違いを見つけるということでしたが、違いがたくさんありとても参考になりました。

・バイオエタノール工場

日本では、大学でバイオエタノールの研究をおこ

なう工場はあるようですが、私の周りにはないため、興味を持ちました。工場全体では2,700人の人たちが交代で勤務し、24時間体制で工場を動かしていました。サトウキビ畑は28,000haとのことでした。そこで採れたサトウキビは砂糖の原料として使用され、品質のあまり良くない砂糖がエタノールになると知ることができましたが、私は全てがエタノールになると思っていました。

また、砂糖を作る時にたまった、その残りカスを用いて、工場内の発電所にて火力発電し、1日に130kwも発電していること驚きました。間近で発電の様子を見てみると、とても大きなタービンが動いて、すごい迫力とすごい音でした。案内の方に、「余った電気はどうするんですか。」と尋ねたところ「30%は他に売っているんだよ」と話してくれました。他にも、熱風でタービンを回していることや、24時間、常に稼働させていることをはじめ、ブラジルでサトウキビ畑は8%しかないこと、牧場をやめてサトウキビを作るほうが効率がいいことなど、たくさんのことを教えて頂きました。その中で、効率がいいからといって、サトウキビ畑に転向することは、そんなに簡単にできることなのかなと不思議に思いました。日本では考えられないようなことをブラジルでは普通にやっていて、これも、すごいと思いました。

エタノールを作る時、原料の砂糖に窒素の粒を入れることで、エタノールができるのを早めることも知りました。その発酵は約12時間で終了します。作ったエタノールはすぐに使えます。もちろん99.9%アルコールです。

この工場の見学は、とても参考になりました。国土の狭い日本ではこんなことは出来ないだろうなと思いました。ここの工場は1日700tのエタノールを作っています。こんなに工場が大きいからやっぱりすごいと思いました。

・アプカラーナ農業高校

アプカラーナの農業高校との交流ができたことです。1日目は、意見交換の場を通して、現地の高校生と交流ができました。学校に寮があったことや、

部活動や学校行事など日本の高校と変わらない高校生活を送っていることを知りました。この学校には1日4回のコーヒータイムがあって、みんなで話をする時間があり羨ましいと感じました。

2日目は学校見学をさせてもらいました。午前中は学校の見学で、家畜や農作物や植物を見ましたが、土壌改良のためミミズを飼育している場所もあり驚きました。また、チーズ・ヨーグルト・ピーナツバターを校内で加工していて、試食もでき良かったです。

午後からは削蹄をしているところを見せてもらい、深爪したりしないのだろうか、自分の学校でもやっているのだろうかなど、素朴な疑問がわきました。

マンジョウカというブラジル原産の芋を見せて頂き、皮を剥く作業が独特で印象に残っています。調理場に入った際、マンジョウカをはじめ、様々な食材が調理してあり、試食させて頂きました。マンジョウカはジャガイモに良く似た味でした。

ここ的高校生は私たちと同じように実習をしているが、農業に取り組む真剣さが違うのか、とても真面目に実習をする姿が目には焼き付いています。改めて自分を見直す機会になりました。

・まとめ

YUBA農場を見学して色々な日本と違うところや、農業規模についてとても勉強になりました、YUBA農場では日本との農場規模の違い、作業方法の違い、自給自足の難しさを実感しました。そういう意味でYUBA農場の見学はとても勉強になりました。

バイオエタノール工場では、自分たちが作ったサトウキビで燃料や砂糖そしてタービンを回して発電していました。日本にもこういう工場があればいいと思いました。

アプカラーナ農業高校での交流を通して、同じ農業高校生として友達でありこれからの農業を互いに担うことを痛感した体験でした。

・おわりに

最後になりますがこのブラジル研修、一番心をうたれたことがあります。それは、『人のやさしさ』です。ホームステイ先の方々や工場の人たちもとても親切でした。みなさんととても笑顔で、あの笑顔を見るとこちらまで元気になれるようでした。またポルトガル語がまったくといていいほど出来ない私に、

ジェスチャーなので対応してくれたり、知らない人に「日本から来たの?」とか話してくれたりしてとても嬉しかったです。私はこのブラジル研修でいろいろなことを学びました。こんな経験ができたのは、親・先生・関係者の方々のおかげです。このブラジル研修で学んだことを将来に生かしたいと思います。



YUBA農場



バイオエタノール工場



アプカラーナ農業高校